保育の現場から

秋の一日　遊び点描

―三歳児の生活から―

稲垣聡子

二学期になり、三歳児もそれぞれが自分の気に入った遊具で、また落ち着く場所で、じっくりと、ゆったりした時間の中で、遊ぶ姿が見られるようになってきました。自分の好きな遊びに一人で没頭している子どもや、気の合う数人の友達と誘い合って遊んでいる子どももいて、保育者は、どの子どもがどこで何をして過ごしているのか把握するために、あちらこちらの遊びにかかわりながら、動きまわる日々が続いていました。

私が担任をする、たんぽぽ組（三年保育の年少組・二十名）では、子どもたちは、この日もブロックを幾つもつないだものを電車に見立て、床に貼ったビニールテープの線路の上を走らせたり、ウッドデッキにござを敷き、ママゴト道具を保育室から運んできて、大人の口調をまねて会話をしながら、成りきってママゴトをしたりして遊んでいました。

どんな電車を作ろうかな

登園して慌ただしく身支度を済ませると、すぐに箱からブロックを取り出し、つなぎ始める**ゆうき**。赤・

黄・青・緑・白など、ブロックの色は数種類あるのですが、緑ばかり選んで長くつなげることを一学期からずっと続けていました。緑色に対する思い入れが強くあり、緑色以外のブロックには見向きもしません。**ゆうき**の周りで電車作りをしている子どもたちも、緑色ブロックを見つけると、「これは**ゆうき**くんの色だね」と、わざわざ**ゆうき**に手渡しています。**ゆうき**の緑色好きは、クラスの子どもたちの間でも、暗黙の了解になってきていました。

保育者は、**ゆうき**の好みを尊重したいと思いつつ、緑色への執着が、より強くなってきていることを案じていました。そして、**ゆうき**が、ほかの色に関心を寄せるきっかけがどこかにないだろうかと、彼にかかわるたびに探ってきました。最近の**ゆうき**は、「緑色のなが～い電車が大好きなんだ」が口癖で、喜々として、相変わらず緑色のブロックを集めて、電車作りをしています。

しゅんも、入園当初からブロック遊びを好み、たくさんつなげて電車を作ることを毎日していました。ブロックはどの色でもよく、周りの誰よりも長くつなげることが、**しゅん**にとっては一番の関心事であると私は感じていました。ほかの人と自分の電車の長さを比べてみて、少しでも短いと、大声で泣いて悔しがるか腹を立てて、せっかく長くつないだブロックを、バラバラにしてすねてしまうことがよくあったからです。「あと、いくつ欲しいの」と保育者が問うと、必ず「三個」と答えます。ほかの電車よりほんの少しだけ長ければ気が済むと察せられたので、**しゅん**と手をつなぎ一緒に保育室内でブロックを探したり、隣のクラスから借りてきたりすることを繰り返してきました。

二学期になり、**しゅん**は、青と白のブロックを交互につなげて、縞模様の電車を作ることや、線路の上を本物みたいに走らすことに興味が移ってきて、長さへのこだわりは、少しずつ薄らいできました。今日も、「これは京浜東北線だよ。かっこいいでしょ。すっごく速く走るんだ」と得意顔で、縞模様電車を線路の上

で勢いよく動かしています。自分のイメージの中に一人でどっぷり浸って充分に楽しんでいるので、保育者は、**しゅん**に対して話しかけられたときにはうなずき、少し離れたところから見ていることにしました。

たいきは、色とりどりのブロックを無造作につなげて、**ゆうき**と電車の長さを張り合っていました。しかし**たいき**は、**しゅん**の満足そうに遊ぶ様子を見つめてから、白いブロックばかりを長くつなげて手で持ち、**しゅん**の傍らに近寄っていきました。「新幹線のほうが、もっと速いんだぞ」と、**しゅん**の目の前に白い電車を突き出しながら、線路の上に強引に座り込み、**しゅん**を尻で押しのけて新幹線を勢いよく動かし始めました。しかし、新幹線が長すぎて、うまく線路の上を走らずに、すぐに壊れてしまいました。**たいき**は、新幹線のほうが電車より長くないと納得できず、注意深く長さを見極めてから急いで作り直し、スピードが出るように強く押し出してみるのですが、今度も線路からはみ出し、ブロックは周りに飛び散ってしまいました。おもしろそうなことを見聞きすると、すぐさまねをしてやってみる**たいき**です。そして、誰に対しても負けたくないという思いをもっています。**たいき**は、**しゅん**の遊びからヒントを得たり刺激を受けて、電車の長さ比べだけでなく、スピードの競い合いもしてみようと考え、長さもスピードも、**しゅん**の電車より勝るものにしたかったのに、自分の思い描いたとおりに遊ぶことができず、少しいらいらした態度を見せ始めました。

気持ちよく遊んでいた場所を、半分取られてしまった**しゅん**は、迷惑そうな顔をして、ぶつぶつ小声で文句を言いながらも、自分の作った電車を大事にして動かしています。「狭いよ。もっとあっちへ行ってよ」と、**しゅん**に強い口調で抗議され、**たいき**はいやいやながら体を線路の脇へ退かしました。保育者は、事の成り行きを見守っていたのですが、二人の距離をあけたほうがよいと感じ、「新しい線路の工事をします」と声をかけてみました。**しゅん**は、「(線路を)もっと

長くしてね」と快く応じましたが、**たいき**は、むっとした顔で答えず、挫折感を体全体で保育者に訴えてきました。そして、今の自分の不満や苛立ちを、誰かにぶつけて気持ちを収めたいと、周りをうかがっているかに見えました。

ゆうきも、**しゅん**も、**たいき**も、自分のやりたいことをしっかりもって遊んでいることが、態度や言葉に表れていました。このことは、一学期とはずいぶん違ってきたところです。また、一人での遊びから、ほかの人とかかわって遊ぶことが多くなると、自分の思うとおりにならないこともあり、葛藤を幾度も感じているようでした。まだ、相手に言葉でうまく説明できないこともたくさんあり、気持ちの行き違いもたびたびありますが、ブロックを仲立ちとして、イメージを共有して遊ぶこともできるようになってきて、以前よりたくましくなったとうれしく思います。保育者としてその子どもに合ったかかわり方を、瞬時に判断して応じていくことは、とても難しいですが、その思いに寄り添うことを、心構えとして常にもっていたいと思います。

何にでも変身してしまうブロック

ゆうきは、緑色のブロックを幾つもつなげて、長さが充分にある電車を作っているにもかかわらず、「(緑色の)ブロックをもっとほしい」と、自分の周りや保育室の中を、キョロキョロと見回していました。ママゴトで野菜に見立てて使っている緑色のブロックを見つけると、遊んでいる人に断りもせず、黙ってポケットに入れて持ってきて、自分の電車にくっつけてうれしそうな顔をしました。それを見ていた**たいき**は、「いーけないんだ、黙ってとっちゃ、いけないんだ」としつこくはやしたてました。「だって、すっごくいっぱい(緑色のブロックが)ほしいんだ、なが〜くしたいんだ」と、**ゆうき**は**たいき**をにらみつけ、緑色の電車を両手で抱え込みました。「返さなくちゃ、だ

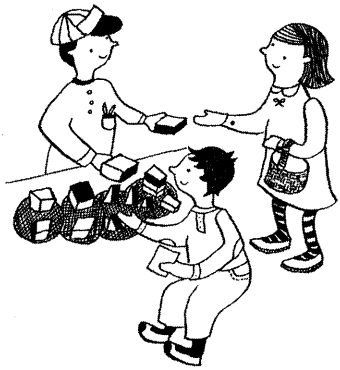
めだよ」と、**たいき**は**ゆうき**の持っている電車の端のブロックを、力づくで無理やり引っぱって取ろうとし、**ゆうき**は取られまいと、体をより硬くしてブロックを握りしめていました。

ママゴトの所では**ゆか**が、「野菜がないわ。どうしよう。今夜のカレーライスが作れないわ」と、**まなみ**に言いながら、ござの上に置いたおなべの中を、ごそごそと捜しています。**まなみ**は、「私が買ってくる。後でメールするから」と袋を持って歩き出し、**ゆうき**と**たいき**の傍らを通りかかると、「ここに（野菜が）あるじゃない。メールしなきゃ」と、袋から小型の積み木を出してきて、メールを打つ仕草を始めました。

保育者は、**たいき**と**ゆうき**の対立している気持ちを、違う方へ向けるよいタイミングだと思い、手近にあった緑色以外のブロックを並べ、「いらっしゃい、くだものやです。りんご（赤ブロック）や、バナナ（黄ブロック）があります。緑の野菜は売り切れです」と、周りの人に聞こえるように言ってみました。**まなみ**のほかにも数人が連れ立って、「くださいな」とやってきました。保育者が、並べたブロックを指差して「どれが欲しいですか。緑の野菜は、ないのですが」と、**ゆうき**の顔をちらりと見てから言うと、**ゆうき**も**たいき**も、くだものやに少し気を引かれた様子で、ブロックの取り合いをやめ、周りの人の言葉のやりとりに耳をそばだてていました。くだものやに並べたブロックは、すぐに売り切れましたが、保育者に代わっておみせやさんになる人も現れて、牛乳（白ブロック）や、ぶどう（青ブロック）も売られるようになりました。

にぎやかに売り買いをしているその場の雰囲気に、おもしろさを感じ取った**たいき**は、早速、自分で作った新幹線のブロックの一部を持ってきて並べ、おみせやさんを始めました。「何でも売っています。緑の野菜は売ってません」と、保育者の言葉をまねて、大きな声で繰り返しています。その言葉につられたのか、**ゆうき**も、握りしめていた緑色のブロックを少しだけ並べて、「野菜売ってます」と言い、おみせやさんを

始めました。わずかの量であり、短時間でしたが、緑色のブロックをほかの人に自分から分けることができました。自分からする行為は、大いに認めたいと思い、「野菜が欲しかったの。おみせやさんにあってよかった」と、オーバーなくらいの表情と身振りを添えて言ってみました。周りの人との触れ合う楽しさを、感じてほしいと思ったからです。**ゆうき**は「はい、どうぞ」と、うれしそうに一個ずつ配っていましたが、**しゅん**の電車が目に入ると、急に緑色のブロックがまた欲しくなり、集め直して、再び電車作りを始めました。



ささいなきっかけから、それぞれの子どもがイメージを広げ、それに伴って遊びの中身も多方面にどんどん広がっていきました。子どもたちは、周りの人の言葉をよく聞いて自分の遊びに取り入れているので、子どもたちの考えを聞くことを第一にして、保育者からはあまり口を出さないようにしていました。想像の世界にすっと入り込んで、成りきって遊んでいる子どもたちは、言葉のやりとりを楽しみ、それを、遊びの中にも活かすことができるようになり、一人ひとりの表情も、豊かになってきたと、最近強く感じます。

それぞれが自分の思いを、思いのまま出せるようになってきたのは、幼稚園が安心して過ごせる場になってきたからだと思います。保育者として、あのときの対応はこれでよかったのだろうかと、自問自答することもたくさんありますが、個々の思いや遊びを大切にし、これからも毎日の積み重ねを大事にして、過ごしていきたいと思います。

（さいたま市　ひなぎく幼稚園　教諭）